



政権の私物化

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼安倍政権は閣僚の相次ぐ辞任に加え、大学入試共通一次試験への民間事業者検定試験の導入が首相の側近である萩生田文部科学大臣の不規則発言をきっかけに延期に追い込まれるなど失態が続いています。極めつけは安倍晋三後援会のメンバーが、「桜を見る会」に大挙して参加していた問題です。

▼安倍晋三後援会の会員に対して、安倍晋三事務所から「桜を見る会」への参加を含む東京

観光ツアーや首相を囲む前夜祭への参加を呼びかける案内が配布され、申し込んだ会員には、後日内閣府から招待状が届く仕掛けになっていました。この催しについて安倍内閣は、10月16日に「内閣総理大臣が各界において功績、功労のあった方々を招き、日頃の御苦勞を慰勞するとともに、親しく懇談する内閣の公的行事として開催しているもの」との答弁書を閣議決定しています。安倍事務所が堂々と行っていた行為が、この閣議決定の趣旨から逸脱していることは誰の目にも明らかです。

▼「桜を見る会」は、1952年に当時の吉田茂首相の主催で開催されて以来、大震災等の理由で中止された3回を除き、毎年4月5月に新宿御苑で行われてきました。200

0年以降の参加人数を見ると、森喜朗時代までは概ね8000人で推移、小泉純一郎時代に1万1000人に増加しましたが、その後は1万1000人でした。それが第二次安倍政権下で1万2000人から1万8000人まで一気に膨れ上がったのです。安倍事務所による「桜を見る会」ツアーは毎年行われ、今年の参加者は10000人にのぼりました。これ以外に政府・与党議員の招待者は6000人に達しており、公的行事の私物化が政権ぐるみで行われていたこととなります。

▼参加人数の増加は当然、開催費用の膨張をもたらします。しかし、こうした現実にもかかわらず、内閣府の開催予算は参加者8000人を前提に1億7600万円のまま編成さ

れていました。予算成立直後に予算大幅超過の入札を公告した内閣府の鉄面皮も大変なものです。これを毎年放置してきた財務省や会計検査院の怠慢も責められてしかるべきです。

▼権力は頭から腐ると言います。長期政権に胡坐をかくことで慢心と驕りが生まれ、従う官僚にはへつらいと忖度が蔓延します。自民党総裁の三選禁止規定は、まさにそうした危険を防止するための先人の知恵でした。その規定を自ら踏み越えた結果が籠池・加計事件以降の政権の私物化をもたらしたのです。安定という名のぬるま湯にどっぷりと浸って変化から目を背けることの愚かさを国民自らが深刻に受け止める必要があるでしょう。